

大辨才天に就きて

——主に佛教思想を中心として——

安 藤 良 全

辯才天 (Sarasvatī) の語源を探れば、「水のもの」なる意である。大體、印度の名稱の起源は、アーリヤ種族が五河地方に移住するや、其の河流の雄大壯絶なる勢力に感じて、「水」或は「海」の義を有せる *Shindū* と名附けたのに始まる程、「水」そのものが、彼等種族に偉大なる役割を演じたのである。如斯、洋々たる大海の流勢が山野を濕し、草木を繁茂させ、人畜を養育するの光景を見たる古アーリヤ種族は、其れの無限の恩恵と、威力との前に偉大なる權威を認め其の前に拜跪せざるを得なかつた。そこで Panjāb 河流の古稱である *Sarasvatī* 河を神格化し、河名そのまゝを踏襲して *Sarasvatī* と名附くるに至つたのである。(B&V)

亦古代には *Sarasvatī* 河の兩岸に於て、彼等種族は嚴肅なる儀式を修することに依て、諸神を祭る風習があつた。而澄渡る水の滑らかなる流を、澱みなき辯舌、嚙々たる樂の音、亦是聖典を朗讀し祈禱を捧ぐる諧調に譬へて、此處に辯舌の鼓吹者となり歌詠音樂を掌る神ともなるに至つたのである。

蓋、水の崇拜に就て二義がある。(鶴藤氏宗教學概論79)

A は對象としての崇拜で、之に(一)あり、(二)は水其物を生きたるものと見て見るのミ、(二)は靈の住家として見るの區別である。

Bは方法としての崇拜で、(一)は水に穢を清むる力ありし、(二)は水浴により魔術的超人力を得るを爲すものである。

今迄、叙述せるものはAに屬するも、亦Bにも屬してゐるのである。(佛像通解參照)

次に當尊の性に就て論ぜん。一般は當尊を女天とするも、或は男天とする異例あり。

當尊は創造主 (Brahma) の配姪 (梵書時代以後) となり、*Bo Veda* に於ては純然たる河神なるも後稍、創造に屬する創案、想像の性質を帶ぶる智慧女神として表現され、デーバナーガリ文字サンスクリット文字の創造神と稱され *Veda* の母とされ、縛支 (*Vag*) 言語神と同一視され、談話の女神の意味を有せる *Vadeviti* も稱せらるに至り、之を以てするも、既にバラモン教に於て、女神として取扱はれた事がわかる。

包容性ある佛教、當尊を取り入るるに到りて、女神として尊敬せし事は次に依つてわかる。

「現爲閻羅 (*Yama-raja*) 之長姉 云云」

「讚天女 請求加護 云」 (金光明最勝王經) (大辯才天女品)

「辯才天女 云」 (不空絹索) (經十五)

「大辯才天女 云」 (大隨求) (經上卷)

「成大辯才天女 云」 (靈雲寺淨嚴律師、) (大辯才天秘訣上)

等あり、我邦に入りては

南無歸命頂禮、大辯才天女、功德天降臨影向

「殊ニ別シテハ大辯功德天女 云」 (空海著辯才天講式) (但偽作)

「謹敬降臨、大辯才天女云々」(同 白紙祭文)

こあり、俗間信仰に當尊は七福神の唯一の女神とせられてある。

我邦俗相傳、有ニ七福神者……中略……有小若下清如レ梅、潔如月、美而不冶、妍而不艷、天然真態、遠山之眉、蛭蟬之聲

細柳之腰、彎弓之足、不假ニ紅粉之氣……而有中幽貞之操上者大 曰辨財天(古事類苑、七福神考序文參照)

如上の例は悉く當尊を女神として、取扱つてゐるのである。而し乍ら

「次北置薩羅伐底、Sarasvatī……中略……次北置其妬云」(大日經疏五)

と記さるるを以て、當尊は妬あるが故に男神ともなる。亦

「……妙音是天名也、金光明云大辯天女……大辯謂後也云」(同疏十七)

之は「妙音」を男神とし、「大辯」を女神とするの別例である。而し乍ら、男神は其動的方面を指し、女神は其靜的方面、即三昧寂靜の德を指してゐることは、次の文に依つてわかる。

「但女者必ズシモ女根ヲ具スルト云フニハ非ズ。寂靜三昧ノ德ヲ指シ、女トハ云フナリ。云々」(大辯才天秘訣上)

當尊は嚮に一言せる如く

「爾時大辯才天女於大眾中……即從座起、頂禮佛足、白佛言、世尊若有法師、說是金光明最勝王經者、我當下益ニ其智慧上」

具足莊嚴言說辯……中略……得令下無量有情聞是經典、皆得不可思議捷利辯才無盡大慧(金光明最勝王經)

「……智慧辯才ヲ與ヘ」云「能ク……辯才ヲ施與ス云」(秘訣四重分別一)

等あり、當尊の功德として、辯才無盡の大慧があるが

譯云妙音天(疏五)美音天、是諸天顯詠美者、與乾闥婆(Gandharva)稍々異。彼は奏樂者也。私曰以之妙音使ニ衆生悅可上

言辭柔軟而使衆生悅可觀喜云(疏)

美音天……是諸天中、歌詠美妙者、猶如下毗首磨工 (Visrakarma) 於技巧之類、非乾闥婆也(大日經義 譯七參照)

こあり、亦歌詠、美音の神とされてゐる。蓋、河水の常に流れて、さ、さ、さの音を發するが如く、當尊も能辯にして、妙音を發するを本性とし、亦音樂の司神ともなつたのである。而當尊は其偉德を次の如く讚歎されてゐる。(最勝王經)

總明勇進辯才天、勇猛常行大精進、福智光明名稱滿、譬如無價末尼珠、應供人天供養應受……中略……得自在、無量勝行超世間離欲煩惱云云

而、先に記した七福神序文の如く、絶世の美貌か云ふに

現爲閻羅之長姉、常着青色野蠶衣、好醜容儀具有、眼目能令見怖云(同經)

こあり、美醜容貌具持し、見る者をして、恐怖を抱かしめるの眼目を有してゐることは、興味ある所である。蓋し醜貌は當尊の未だ正覺を成ぜざるの意の表現であらうか。亦或は、次に記す大誓願の巖も徹す大信念の外部に顯現せる姿貌であらうか。

世尊若有必芻 (Bhukṣu) 必芻尼 (Bhukṣuni) 鄔波索迦 (Uṣāka) 鄔波斯迦 (Uṣāka) 受持讀誦書寫流布是妙王經……中略……行者若在城邑聚落曠野山林僧尼住所……而我爲是人將諸眷屬……除諸病苦流星變怪疫疾鬪爭王法所拘惡夢惡神爲障礙者、虫道厭術悉皆除殄、饒益是等持經之人必芻等衆及諸聽者……皆令速渡生死大海不退菩薩云云

こあり、更に亦同經に
若於戰陣怖畏處或見墮在火坑中河津險難賊盜時、或被王法所枷縛或爲怨讎行利害、若能專注心、不移、決定解脫諸憂苦云云

こあるが如く、或は修法するに障礙なる諸病苦流星、變怪乃至惡神等を諸眷屬と共に除し、蟲道厭術悉くを除糝し、速に不退菩薩たらしめ、或はあらゆる怖畏を除するの大誓願が立てられた譯である。即上述の佛法修行上の障礙を除し亦畏怖を排するの神變遷したのである。亦有情の聖教の忘れ易き點を察して憶持の神もなつた。即

若彼法師於之經中、文句所有忘失、皆令憶持能善開悟、復與陀羅尼云（同經）

而、陀羅尼を與へるに記されてある。蓋、陀羅尼（Dhāraṇī）とは譯して「持」と云ふ。善法を持して散せしめず、惡法を持して起らしめざる力用に名附く。之に四種ある。（一）法（聞）陀羅尼（能持の體、念・慧）（二）義陀羅尼（三）呪陀羅尼（定を體す）（四）忍陀羅尼（無分別智を體す）の四である。而之の經の意は（一）法陀羅尼を指すのである。』而亦同經に

「善解衆論及諸技術云云」こあり、既述の如く

「若有法師……我益其知」或は「人得最上智」こある如く諸技術の神、智慧の神になつたが更に一步進みて、求福者求財者に對し、其の希願を滿すべく誓願が立てられてある。

「……讚天女、請求加護得福無邊也」（同經）

「與福智……略……增上福智諸功德。必定成就勿生疑。色求財者得多財……略……求名聲者獲名聲……略……必定成就勿生疑。衆生若有希求事、悉能令彼速得成。……略……若有衆生心願事。善士隨念令圓滿云云」（同）

「若有善男子、善女人、交食窮迫狂難時、唱我名號則隨音聲往其所、與壽德福、除狂苦若不得、吾墮妄語罪、永不成正覺云等」（內證經辯才天講式照）

こあり、即當尊を信するものには、福德壽命等諸の功德が増上し、財を求めんこ欲するものには多財が與へられ、名聲を求めんこするものには名聲が施され、あらゆる希求願事は速かに成就させ、當尊の名號を稱へる善男子善女人の現前

に趣き福德壽命が施與され、狂難苦境に墮入れるものには救済され得るのである。若し然らずんば、自己は五戒中の妄語戒の犯者であり、従つて之の罪に墮する事は必定であるが故に、永く正覺を成ぜないこの大願を立てたのである。

(尙我國に於て、施福天を爲せるに次の事がある。山門の相傳に傳敎の感得せし三面八臂の大黑天中、右面は毘沙門天左面は當尊にして鑰を寶珠を持つ。之の大黑天には降魔を施福の二義あることを示し、之を兩天に分割せしめ總別合體二德の相ある事を示したものであるが、而、之に依つて、當尊は施福の神とされた事がわかるのである)。

加之、當尊は

可レ加加 非我願 不レ加加 此尊之別願云云

とあり、

……若無今生宿福者 能引導

(內秘密經 弘法大師全集五編參照)

と記さる。即今生に宿福の因ある者は吾が救済を得なくとも、諸佛菩薩之を良く引導し不退轉か得られるのである故、敢て自己の救済は要せないが、而し今生に宿善の困なき十惡五逆の大罪人にして、諸佛菩薩の救済に預らない者は、來世に苦難の鬼界に入り、永く出離を得ず佛格に昇るは、浮木の龜に似たるに雖も、我が大願業力に依り、之を救済して不退の位に登らさしめんとの大願である。

即諸の庶類の爲に不請の友となり、群生を荷負して、己が重擔としてゐるのであり、不請の法を以て諸の黎庶に施し諸衆生を見る事、自己の如くなつてゐるに云ふべきで、此處に至りては、實に大辯才天の窮局の眞面目に云ふも過言ではあるまい。

上述の如く、知慧言語神縛支と結ばれ、知慧首の神ともなつた當尊は、福德神吉祥天 (Sītor mahasī Lakṣmī) と共に金光明經に説述されてある。吉祥天は悔過法の本尊として、早くから民間信仰を得たるも當尊は吉祥天程民間に信

仰を獲得せなかつた。之が信仰は本邦に於ては中世以後に屬してゐる。

天台大師著、國清百錄中、金光明懺法には、佛座の左に吉祥天の座を設け、その右に四天王の座を作り、懺法を嚴修する事が記され、更に、釋迦如來を招携して修法する事も記され、道場廣ければ辯才天の座も設くる事を得記されてあるのを以てしても、當尊が相等仰信上、有力なる地位にあつたかわかる。

x

x

x

曩に記した如く、當尊名、妙音ミョウオンは Sarasvatī 河の流水の樂的音そのものである故、當尊の三昧耶 Samaya 形（佛菩薩内證本誓の標幟）即象徴は琵琶である。（但し、之の音樂を司る天として琵琶を持つ形相は、バラモン教の Sarasvatī 神像の形相を、其儘佛教に取入れたるものである）。而して

天ハ妙音雅典ヲ以テ佛德ヲ歌讚シ、上諸佛ヲ供養シ、下部類ノ諸天、五道（趣）ノ群類ヲ利益スルヲ以テ本誓トス。故ニ琵琶ノ四絃ハ即四無碍智ナリ。絃ヲ彈ジ、出ス所ノ妙音ハ即四無碍辯ノ言語ナリ。之ハ天ヲ菩薩ト見ル義ナリ、亦大日所變ト相違ナシ云（秘訣）

斯くして當尊を菩薩と見る義より、亦大日所變と相違なき點より、四絃の妙音は四無碍辯となつた。蓋し、四無碍智は、即四無碍辯或は四無碍解と云ふ。是諸佛菩薩の智辯であるが故に意業に約して四無碍解・四無碍智と云ひ、口業に約して四無碍辯と云ふ。

四無碍智		所詮
樂（樂無碍智）	辭（辭無碍智）	
義（義無碍智）	法（法無碍智）	
		能詮

次に又

次ニ最極秘密ニハ五絃ナリ、五絃ハ表五智……之五智ノ五絃ナリ。宮・商・角・徵・羽ノ五音ヲ出シテ五藏ノ般若ヲ説キ、五道流轉ノ衆生ノ五根本ノ迷情ヲ蕩盡シテ、五輪具足ノ肉身、サナガラ五大五佛ノ本體ナリケリト了達セシメルナリ。之天即大日ト見ル義ナリ云

(同上)

こある。蓋し、五智ミは第八識を轉じて四智を成じ、究竟の法身如來ミ立て、之に第九識所轉の法界體性智の一を加附して、金剛界智法身の大日如來ミなすもので、(一)法界體性智、(二)大圓鏡智、(四)妙觀察智、(五)成所作智の五智の義である。五根本ミは貪・瞋・痴・慢・疑を指し、五輪ミは左膝・右膝・左手・右手・頭首を云ふのである。

要は、最極秘密ミしての琵琶の五絃は、五智ミしての五絃であり、爰に於て大日即辯才天・辯才天即大日ミなる。尙同祕訣上に、此天に就きて四重の分別を爲してゐる。

(一)淺略ノ釋者。之此ハ實類ノ天ナリ。宿善深厚ナルニ依リテ、智慧辯才ヲ得テ、最勝殊妙ナリ。亦能ク衆生ニ與ヘテ満足セシム。云云

(二)深祕ノ釋者。之ノ天ハ大權(佛菩薩の大聖權に異形を化現せしもの)垂迹ノ神ナリ。

本地ノ遇界甚深難思ナルヲ以テ、能ク外ニ威勢・福德・財寶・壽命・名稱・辯才ヲ施與ス……中略……其本地ハ所謂大日如來ナリ。現等流法身ニ成大辯才天女。外金剛部ノ西方ニ在リ。阿闍梨所傳漫拏攞ニハ、南方ニ在リテ身黃色ナリ。

釋迦如來ノ眷屬タル事ヲ示シテ、其ノ化道ヲ助ケテ妙音ヲ以テ祕密乘ヲ説キ、衆生ヲ引誘ス。亦之ノ本地ニ就キ、或ハ妙音菩薩、或ハ觀自在菩薩、或ハ地藏菩薩ノ垂迹トスル義アリ。先法華妙音品ニハ、或ハ現天龍夜叉人非人等身ニ爲是經。所現ノ天身ニ辯才天ヲ不可簡故、況ヤ又本地垂迹體異レドモ、同ジク妙音ト名附ク。……中略……

次ニ地藏十輪經ニハ地藏菩薩ノ所變ニ護天神アリ。之ノ中ニモ大辯才天アルベキガ故ニト云フ云々

(三) 祕中深祕釋者。實ニ十界依正ノ形色・性類皆大日如來ノ妙體ナリ。故ニ之天ノ辯才ハ大日如來ノ四無碍辯ナリ。智慧ハ大日ノ五智・福德・壽命・威神等一トシテ大日ノ所具ニ非ズト云フ事ナシ。

(四) 祕々中深祕釋者。行者全體即大辯才天ナリ。即大日如來ナリ。之三位一體ニシテ二ナク別ナシ。……中略……今日凡夫所出ノ言辭辯才ハ本尊天女ノ辯才ノ一分出現セルナリ云々

以上の四重分別次第して、(四) 祕々中深祕密釋に至り、行者ミ大辯才天女ミ大日如來は三位一體の關係にあり、今日有情所出の言辭辯才は大日如來、即當尊の分體の幾分かの顯現あり、煩惱の冥雲を排除し、佛覺に登つたる時の言辭辯才は、即大日如來であり、當尊ミ爲す義である。

亦辨財天三經略疏序に

此天在_ニ天竺_ニ 則稱_ニ辨財天女_ニ……現日本則名大日尊_一 或稱_ニ天照太神_ニ云云

是即、大日即當尊ミ爲したるもので、前の祕々中深祕釋に相應するものであらう。而或天照太神即當尊ミするに至つたのは、その上我國の奈良朝時代の佛教の本地垂迹の餘波を享けて斯くなりしものであらう……。

當尊の形像は大別して二ミ爲し得る。

(一) は八臂にして種々の器械を具持してゐる。

(二) は二臂にして左膝を立てゝゐる。(小野玄妙
佛像研究)

今先ず(一)に就き考察しやう。

A。八臂弓・箭・長杵・鐵輪・及絹索等を具持する像。即面貌容儀人樂觀。種々妙德以嚴_レ身、目_ハ修廣而如青蓮之葉_一……

中略……常以_レ八臂_ニ自莊嚴_一、各持弓・箭・刀・杵・長杵・鐵輪・并絹索_一 端正樂見如滿月

(金光
明經)

さあるのが、之の形像である。

B。八臂棒・三鈷・弓・箭・輪及索等を具持する像。女天形八臂、左第一手鐙、次三股杵、次弓、次輪。右第一手鐙、次鈎、次矢、次索。(十卷抄)

さあり、即之の形像である。

C。八臂弓・矢・寶珠・劍・棒・鎚・輪等を具持する像。

之は近古流布の像である。其像の左第一手は胸に當てゝ寶珠を掌にし、次の手は三鈷、戟を持し、次の手は弓を執り左第一手は劍、次の手は棒、次の手は箭を持つてゐるのである。(佛像圖彙三)

A'。二臂琵琶を具持する像。

胎藏界曼陀羅には、外金剛部限の西方、那羅延天 *Narayana* の傍に住し

辯才天、白肉色、彈琵琶(秘訣記下)

さあり、亦眞言曼陀羅の金剛部にある一尊となつてゐる形像である。

左手ハ肘ヲ開キ拳ヲ仰ギ琵琶ノ頸部ヲ持シ、右手ハ拳ニ作シ、持シテ之ヲ彈ズ。左膝ヲ豎テテ坐シ、頭ヲ少シ右ニ側ク。(諸説不同記第十)

さあるのは之の形像を顯はしたものである。

B'。二臂三戟等を具持する像。

或執三戟云々(金光明經)

C'。二臂刀及寶珠を具持する像。

一般天女の形にして、左手には寶珠を掌にして、右手には刀を持するのが、之の形像である。(圖彙三)

以上、大略八臂二臂の形像を略述した。

當尊の常印相として琵琶で費拏の形であり、左手の地水火風の四指を伸べて胸の邊に置き、右手大指を以て頭指を捻じ、餘指を散じ、運動して箏篋を弾するの勢を爲してゐるのが普通である。(四指は琵琶の四絃)
古來當尊には次の諸經が傳へらる。

A、三部經

- (一)佛說最勝護國字賀耶頗得如意寶珠陀羅尼經 一卷
- (二)佛說卽身貪轉福德圓滿字賀神將菩薩白蛇示現三日成就經 一卷
- (三)佛說字賀神王福德圓滿陀羅尼經 一卷

B、五本經

- (一)三部經の (一)
- (二)同 (二)
- (三)同 (三)
- (四)佛說大字賀功德辯才天經 一卷
- (五)佛說大辯才天女祕密陀羅尼經 一卷

C、金光明經

- (一)金光明經 四卷 北涼 曇無讖譯
- (二)合部金光明經 八卷

隋寶貴等前譯ヲ取り、缺品ヲ補釋合入セルモノ。

(三)金光明最勝王經 十卷 唐 義淨譯

先づ、三部經・五本經を視るに、題名の明示する如く、其の説に字賀神王なるものあり、顯現してゐる。字賀の梵語は Dhā y

字賀耶 梵語。即天女號也 (三經略疏一)

こあり、

是時、金剛手菩薩即告大衆言、汝等當知、今此會中有三神王、名曰字賀神將……中略……字賀神王從座中顯現其形一如天女眉白、頂上有寶冠、冠中有白蛇、其蛇面如老人……復此神王身如白蛇、如白玉 (最勝護國字賀耶頓待如意寶珠陀羅尼經)

此天在天竺則稱辨財天女、或號字賀神王 (三經略疏序)

我此道場如帝珠辯才天女、影現中我身影現字賀神頭面接足歸命禮 (講才天講式)

こあり、字賀神王は當尊の尊號である。亦冠中に白蛇あり、其蛇の面老人の如く、此の神身は白蛇の如しこあり、字賀神は白蛇であるこせらるゝに至つた。字賀神に就ては、無量劫より以來大慈悲を修習して、一切有情のために、大良福田となつた。而るに三惡神あり衆生より離れず、十方諸佛福德を與ふるも、其惡神障礙して有情福を被らざるも字賀神白蛇もて降伏し障礙を除する (桂月金集) こ云はれる。 (因に字賀神の形相は八臂であり、左第一手は寶珠、第二は寶鉢、第三は寶鐺、第四は寶弓を持し、右第一手は寶劍、第二は寶鉢、第三は寶鐺、第四は寶箭を

然るに

福の神を字賀神と申す心如何。神代に伊弉册尊の萬の神を生み給へる中に倉稻魂尊云ふ神を生み給へるは、稻を司り給ふ神也。「ウケ」云ふを、通音なれば、字賀云ひなしたるにや。……蛇を今の世に字賀云ふは、字賀神の

蛇の形に變じて、人に見え給ふ心か。實の蛇は何ばかりの福分かあらん

(壇囊
鈔四)

こあり、亦宇賀神は保持ツクセテの神の名で蛇ではなく、亦當尊トコノミも全然關係のない事が明示されてあり、實に之等の經は、之の點に於て曖昧極まるもの云ふべきである。

而、後世に於て辯才天を辨財天ヒンサイテンと記すに至つたのは、五穀神たる倉稻魂神に附會せられたる所より出ており、亦市杵島姬命を始め、なべての姫神達を蓮華三昧經及辨財天經ヒンサイテンにある財施ヒンサイと云ふに基きて、辨財天ヒンサイしたるなり云々、神道問答下(古事類苑中)にある。

更に

爾時佛告大衆諸大菩薩言、汝等於此神王、莫作輕慢、此神王在西方淨刹、號無量壽佛、在娑婆世界、稱如意輪觀音、正生身之體居日輪中、照四洲暗、現吒枳尼トクニ之形、福壽施衆生、現大聖天身、令拂二世障難、以愛染妙王形、一切衆生ニ授愛福、終令致無上菩提。

こあり、本地は無量壽佛、化身として、如意輪觀音、吒枳尼、愛染妙王ニなり、各衆生を利する事が記されてある。

次に 最勝護國字賀耶頓得 如意寶珠陀羅尼經 に侍童として、十五童子を擧げてゐる。今其の名、本地を擧ぐれば

童子名 本地

(一) 印 鑰 童子 釋迦 如來

(二) 官 帶 童子 普賢 菩薩

(三) 筆 硯 童子 金剛手 菩薩

(四) 金 財 童子 藥師 如來

(五)	稻	紐童子	文	珠	菩	薩
(六)	斗	升童子	地	藏	菩	薩
(七)	飯	檀童子	梅	檀	光	佛
(八)	衣	裳童子	摩	利	支	天
(九)	蠶	養童子	勢	至	菩	薩
(十)	酒	泉童子	無	量	壽	佛
(十一)	愛	敬童子	觀	音	菩	薩
(十二)	生	命童子	彌	勒	佛	
(十三)	從	者童子	龍		樹	
(十四)	牛	馬童子	藥	王	菩	薩
(十五)	船	車童子	藥	上	菩	薩

であり、之の十五童子、各神呪を説き、宇賀神王に給仕し、一日より十五日に至り、日々相當り、衆生に福德を與ふる事を司るのである。

而し、以上を説き來つた三部經及五本經は、文體頗る和臭粉々たるもので、經藏目錄にも記載されてはいないので、之の偽經なる事を知る。

次に、金光明經を見るに、當尊の事は大辯才天女品のみに記されてゐるが、大體此の經の流布護持せらるる以所は、四天王を始めとして、一切の天神地祇、國家を守護し、人を益し國に災難なく、人に豐樂ある事を反覆證明せるが故である。

奈良朝のあの崇佛の帝、聖武天皇之の經に依りて、天平十三年(741)諸國に國分寺、國分尼寺を建立し、國分寺を金光明四天王護國之寺と稱し、之の經を讀誦、講讀せしめ給ふた。平安朝に至つて、最澄は、之の經に法華仁王兩經を加附して、鎮護國家の三部聖經として、嵯峨天皇弘仁二年叡山法華堂に於て、之の經を講義した事もあつたのである。

當尊の住所に關しては、祕訣上に

依高山頂勝住所_レ茅爲_レ室在中居。亦在山巖深險處。或居坎窟及河邊。或在大樹諸叢林、天女多依_ニ此中_一住、假使山林野人輩、亦常供養於天女云々

とある。後世、先記せし施福天の辨財天として民間の俗信を得、如上の位置に祠られてあり、その像容も、最勝王經所説の如く、八臂を作らず、單に掌上に摩尼寶珠を取るが如きものとなつてしまつたのである。